遠藤萬里先生を送る

諏訪　元（人類学専攻）

遠藤先生は私にとっては大先生であり，この度，「送ることば」を広報に執筆することになり，たいへん恐縮しております。先生のご退官という社会行事を通じ，改めてお互いの年齢を認識させて頂きましたが，思えば，ちょうど私が学部3年生として人類学科へ進学した時，遠藤先生は今の私の年齢だったようです。

当初，人類学以外の興味に明け暮れていた私は，不覚にも詳細は覚えておりませんが，先生のご指導をはじめて個別に受けたのは，大学院を受験する前に研究テーマなどについて相談申し上げた時だと思います。その後はご指導を常時いただきましたが，先生の幅広い研究興味と「守備範囲」，さらには様々な工夫によって，通常得られないデータ，あるいは標準以上に精度の良いデータを収集することを基本とした先生の研究姿勢の恩恵に預かったのは私の他，多数の大学院生であったと思います。

遠藤先生は広く形態人類学を専門とされると私は考えますが，人類進化を扱う形態学では化石などを含めた骨格標本などの比較形態学的研究，さらには形態の機能的解釈をより精密に論じるための生体機構学的研究が中心となります。同一人物がこの双方を効果的に扱うことは難しく，例えば，私は前者のみで精一杯でございます。ところが，遠藤先生は双方について，一流の研究成果をあげてこられました。

先生はフィールドワークによる一次資料の収集にも積極的な姿勢を示し続けられました。ご自身，発掘などの野外調査にも従事され，特に，西アジアのネアンデルタール人類のアムッド人調査では中心的役割を果たされました。また，アムッド人，港川人，明石人の形態学的研究では高水準のモノグラフィックな業績を残されました。一方，アムッド調査と同時進行的に，顔面骨格の力学的研究を進められました。この研究テーマについては新しい計測機器を導入し，近年も拡張されていますが，ご研究の骨子を組み立てたのは，先生が30才ごろのことと思います。アムッド人研究などと並行して行われたことは，いかにも超人技です。

顔面骨格の力学的研究の成果は1960年代中ごろに発表されましたが，その後の研究史を概観すると，いかに画期的な研究であったかが一目瞭然です。先生のご研究は顔面骨格の進化を論ずる時の中心的モデルとして約30年間，文字通り君臨しつづけ，世界の人類学者をリードしてきました。1980年代のほとんどを私は米国とアフリカで過ごしましたが，外国人研究者は皆，遠藤先生の先駆的な業績をもって，年輩の先生と思うらしく，そうでないことを，私は，再三，あちらこちらで説明したものでございます。

先生はここ数年のころ，教室，他の学内組織，あるいは学会などの運営に，お時間をとられていらっしゃいましたが，この度，退官されたことを機会に，ご自分の時間を取り戻され，ご研究をさらに発展されることをお祈り申し上げます。特に，形態学の2側面双方を世界的水準でこなす数少ない研究者として，私どもをご指導しつづけて下さることをお願い申し上げます。